

銀の羽、金の羽

緋織

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

ある日突然森の中に飛ばされた少女

彼女の目の前には画面の向こうにしかない筈の生き物・・・ポケモンの姿が

人を信じる事を恐れた少女はポケモン達との

そして新たなる世界での出会いの中で

どう変わっていくのだろうか

目次

プロローグ	1
イツシユ編	
第一話	5
第二話	10
第三話	15

プロローグ

「……ハハ、何処よ」

とうに日も暮れ、闇に包まれた森の中に少女は一人立ち竦んでいた

「えっだって僕ちよつと前まで部屋で寝てたよね？お腹減ったからって部屋から出ただけだよ？なんで森の中にワープしてるの？そんな能力持った覚えはないよ」

自分の身に起こった事に呆然としながら取り敢えず人のいる所へ移動しようとして歩き出した

「こういう時って勘に頼って動かない方がいいってよく言われるけど動かなきゃ状況変わんないしね……月が向こうだから、こつちが南であつちが北か……よし、南だ」

サバイバーな友人から聞いた蘊蓄を思い出しながら南へ足を進めていると彼女の知る、だがかう筈のない生き物が視界に飛び込んできた

「いやいやいやこれ、偽物……じゃなさそうだし。って事はこれトリップ!?!……ううん、そんな事気にしてる暇ないや。取り敢えず簡単な手当てだけでもしないと」

少女は木の陰に隠れるように倒れていたヒトカゲに近付くと、何故か手元にあった鞆から包帯を取り出し応急手当てをした

「ヒトカゲ、それも色違い．．．ここ、カントー地方？」

ヒトカゲはカントー御三家の一匹．．．ポケモンは全世代（b wまでとします）をやり込んでいたためその辺りはよく知っていた

「まっどつちにせよ怪我人（？）を動かすのは良くないし今日はもう真夜中みたいだし寝るか」

彼女はヒトカゲから少し離れた木の陰へ移動すると、さつさと眠りについた
「（あのサバイバル馬鹿に何回か付き合ったのがこんな所で役に立つなんてね）」

「ん、よく寝た．．．ヒトカゲ君や、怪我は大丈夫？」

「ギャウ」

少女は目が登る頃に目を覚ました

真夜中に見かけ手当てをしたポケモン．．．もう夢だと思うのは諦めた．．．の容体をみるともう大丈夫らしい

「そっか、それは良かった．．．さて、まずは街にでないと．．．？どした」

「ギャウア」

歩き出そうとするとズボンの裾を掴みついて来るヒトカゲ

「・・・僕ボール持つてないからゲット出来ないぞ」

「ギャウ」

「まあ好きにすれば?・・・頼りにしてるよ」

「♪」

ゲット不可といっても放す気のなさそうなヒトカゲに少女は早々にサジを投げ、ヒトカゲをお供に改めて歩き出した

「・・・広い!この森広いわ!って看板だ・・・えつと」

【北へ行くとカラクサタウン

南へ行くとカノコタウン】

「ここ、イツシュか・・・ってことはbw?いや、ポケスペとか確かbwの二年後が新作で出るって話もあったし決めつけるには早いかな」

「ギャウ?」

「なんでもないよ。まあ取り敢えず、この森を抜けますか……いい加減虫ばかり鬱陶しいしね。ヒトカゲ『ひのこ』」

少女は一旦頭を振ると、森を抜ける事に専念する事に決めた。

イツシユ編

第一話

日が昇り始めた頃から林を歩き続けて漸く森を抜けた頃

空を見上げると既に頂点から傾き出していた

「ふうやつと林を抜けたあ．．．思つたより広いね、ここの林」

時折ヒトカゲの先導に任せながら林を抜けたその先には小さな町があつた

「．．．あー何だろ。大して野生生活送つたわけじゃないのに凄くホツとしたや．．．さて、君には悪いけどボールを手に入れたら必ず戻るからここで待つて『ギャウ!?』ヒトカゲはこの地方じゃ珍しかった筈、目立つと厄介だから．．．あら、こんな所にヒトカゲ?」．．．遅かつた」

町を背にヒトカゲと話していた事と、異世界へトリップした事による衝撃から後ろから近づいてきた気配に気付かなかつた

「このヒトカゲ、あなたの手持ちの子?」

雪の後ろに立っていたのはカノコタウンに研究所を構えるアララギ博士だつた
「いいえ、この森で迷子になつていたらこの子と会つて案内して貰つただけです」

『ギャウギャア!』

「ヒトカゲはあなたの手持ちになりたいみたいだね。よし!このボールをあなたにあげるわ」

「・・・ぼく、お金ないですよ」

「いいのよ、ボールの一つ位・・・ほら、ヒトカゲが待ちわびているわよ」

「変わりもの(この子も、この人も)」

雪はアララギ博士から受け取ったボールでヒトカゲをゲットした

二人はカノコタウンの研究所へ移動した

「にしてもこんな時期に林にいるなんてどうしたの?」

「(きた!)それが・・・よく覚えていなくて・・・気がついたら林の奥にいたんです」

雪は素直に異世界から来たみたいです・・・といった所で信用出来ないだろうと判断し、嘘はつかずに真実のみで誤魔化す事にした

「ポケモンも持たずに?」

「はい(そもそもいなかったし)」

アララギ博士は嘘はついていないと判断し、名を呼ぼうとしてまだ聞いていない事に

気がついた

「そういえば自己紹介もしてなかったわね。私の名前はアララギ。この研究所でポケモンについて研究してます！あなたの名前を聞かせて貰ってもいいかしら？」

「ぼくは・・・僕はネーヴェ」

「ネーヴェか、綺麗な名前ね。よし！あなたに一つ提案があるんだけどいいかしら？」

雪・・・いや、ネーヴェは嫌な予感がするのを感じた

「・・・なんでしよう」

「このポケモン図鑑を持ってイツシユ地方を旅してみない？」

「(嫌な予感の中) 旅に出るのはいいんですけど僕なんで僕なんですか？」

「勘・・・かな？今回図鑑は三機一組で作ったのよ。でもそれを託してもいいと思えるトレーナーが一人しか見つからなくてね。でもあなたなら大丈夫だと思ってる」

「(三機一組の図鑑って事はポケスペか) まあ期待に応えられるよう頑張りますよ」

漸く自分のいる世界観がわかった所で図鑑を受け取ることを了承した

「旅に出る必需品はこっちで用意してあげるから明日取りにいらつしやい。ポケセンに連絡しておいたから今日はゆっくり休みなさいな」

「ありがとうございます」

ポケセンの一室にて

「えつと、ポケセンはトレーナーカードがあればタダで利用できるが、食事は有料。でもトレーナーにらかなり優遇される

やっぱゲームみたいにすぐに回復とはいかないか。

それで思い出した、ヒトカゲ」

ネーヴェエはヒトカゲを出すと少し苦勞しながら抱き上げた

「君さ、ニツクネームつけていい？」

『ギャウ?』

「ニツクネーム。《ヒトカゲ》っていう種族十把一絡げの呼び名じゃなくて君だけの」

最初は疑問に思っていたヒトカゲもこう説明されて理解したらしい

《ギャウア!》

「あはは、気に入らなかつたら言ってみてね．．．迦楼羅、『カルラ』っていうのはどうかな?」

《ギャウ!》

ヒトカゲは大いに気に入ったらしい

「よかった。カルラ、これからよろしくね?」

《ギャ!》

「うん、じゃあ明日に備えてそろそろ寝よつか・・・おやすみ」

第二話

アララギ博士から函鑑を託される事になった次の日・・・ネーヴェエはアララギ博士から（本人の強い希望により）借りたお金で服などを買った

現在の様相・・・ネイビーのジーパンに緋のTシャツ、その上から黒に青い炎のプリントのジャンパー、靴は紺のランニングシューズ。そして髪はポニーテールに纏め上げ、薄紅の髪紐で結わえている

「まっこんなもんか・・・今は春。夏になったらパーカー脱げばいいし」

持っていた荷物を必要な物だけ分け、それ以外は適当に処分した後、約束通りアララギポケモン研究所へむかつた

「こんにちは、アララギ博士」

「こんにちは。あら似合ってるわよ、その格好」

「ありがとうございます」

アララギ博士は奥から少し大きめのシヨルダーバッグを持つてくると、中の道具を一通り説明した

「・・・で、このバッグはどれだけ入れても重さはさして変わらないから旅には便利よ」「すごいですね・・・何から何までありがとうございます」

「そうそうこれも渡しとかないとね」

そう言つて手渡されたのはボールベルトだった

「それならボールの持ち運びも楽でしょ」

「わあ・・・こんなものですかね」

ボールが右側にくるようにベルトを留めると改めてアララギ博士に向き合つた

「さて、ここからが本題。これがポケモン図鑑よ」

アララギ博士の手には桃色の機械が握られていた

「既に所持者の登録は済ませてあります。これは他の地方含めても十五、六台ほどしかない貴重な物なの」

「奪われる可能性もあるから注意しろ、という訳ですか」

「端的に言えばそうなるわ・・・そしてまだ三人目が決まっていから関係ないかもしれないけどこの図鑑は正しい所有者の手にある状態で三機揃うと共鳴ランプと共鳴音が

します」

「へ？（やっぱりポケスペだ）まあ三人目が見つかったからですよ。それが機能するのは」

「まあそうなるわ・・・さて、話しておくべき事はこの位かしら。ああそういえばバッチケースを入れておくのを忘れてたわ」

「あっ」

ネーヴェエとしてはジム戦が楽しみだったのでそれに気付けた事にホツとしていた

「よし！これで準備もバッチリです」

「頑張つてね、ネーヴェエちゃん」

カノコタウンを出て数時間後、ネーヴェエはカラクサタウンに着いた

「野生もトレーナーもひのこ一発・・・レベル差があるとはいえバトルにならないんじゃないかなあ」

ザワザワ

ザワザワ

ザワザワ

「?人だから・・・誰かの演説か」

カラクサタウンのポケセンでカルラの回復が終わった後、少し町をぶらついてみよう
とポケセンを出たネーヴェエはすぐ近くの人だからで誰かの演説が始まるのをみて何と
なく聞いてみることにした

「皆さん、今日お話するのはポケモンの解放についてです」

しかし演説が始まって僅か数秒でその選択を後悔した

「阿呆らしい」

「!へえあんたもそう思うんだ」

「うん、解放にせよ利用にせよどちらも人の勝手な都合でしかない」

呆れたとばかりに零した言葉がかさなり、ふと声のした方を見ると、そこには綺麗な
紅い髪をした同じ年頃と思わしきトレイナーの姿があった

「あはは!気に入ったよ、あたしはスピネル。あんたは?」

「ぼくはネーヴェエ・・・ねえそれって、ポケモン図鑑?」

ネーヴェエは微かにカバンのポケットから覗く自分が貰ったものと同じ図鑑をみてそ
う問いかける

「!ああ・・・つてあんたも凶鑑貰ったの?」

「うん。君なんだ、アララギ博士が言ってた凶鑑所有者」

「一応ね。まっあたしはあたしのやりたいようにやるけどさ」

「同感・・・ねえ、ここで会ったのも何かの縁。バトルしない? 一対一で」

「・・・そうやって自分のためにポケモンを傷付けるんだね」

「!!」

二人が意気投合している後ろから険を孕んだ声があった

「君達みたいな人を見る度に思うんだ。それでトモダチは幸せなんだろうかって」

「(N?) そんなものポケモンそれぞれだと思っけど? 戦うのが、強くなるのが好きなら

多少の痛みなんてものともしないし」

「なら君のトモダチの声を聞かせて貰うよ」

「とどのつまりがバトルね。スピネル」

「審判は任せて。」

勝負は一vs一。入れ替え道具使用共に禁止

「このルールに異論はないね?」

「ない/ないよ」

「じゃあ・・・バトル開始!」

第三話

「さて、ネーヴェエはパートナーのヒトカゲを選択！対するNはチヨロネコだ！」

「・・・ねえ、その実況中継的なのは何？」

「ノリ」

大変素直な答えにかすかに頭痛を感じるも気を取り直してNに向かい合うネーヴェエ・・・その目は新米トレーナーにありがちな熱を孕みながらもきつちりと冷静さを保っていた

「カルラ、勝つよ」

『ギアウ！』

「では気を取り直して・・・バトルスタート！」

「チヨロネコ！《ひっかく》」

「カルラ！チヨロネコの足元と視界を遮る様に《ひのこ》連射！」

《ひのこ》は現実、ゲームと違いひのこを地面にぶつければ土煙がおきるのは野生とのバト

ルで既に確認済み。それを利用してまだ覚えていなかったえんまくの代用として使用する。

トレーナーの意を感じ取ったのかカルラは一発で走つてくるチヨロネコの足を止め、そのまま二発連続で地面に打ち土煙を巻き上げさせる

更に駄目押しとして放った三発目でチヨロネコの視界は完全に潰された

「チヨロネコ！落ち着いて！」

Nはいきなり連続してひのこを打ち込まれ視界を奪われパニックになったチヨロネコに声をかけるが我にかえるより早くカルラからの追撃が襲う

「そのまま《ひのこ》！」

薄らと土煙に写ったチヨロネコに躊躇いなくひのこを指示するトレーナーとそれに従うポケモン・・・審判役を買ってでていたスピネルはその様子に頬を引き皺らせた

「(うわあ容赦無いね)・・・チヨロネコダウン！よって勝者ネーヴェ&カルラ！」

「まあ初陣としてはこんなもんか・・・ご苦労様、カルラ」

バトルの最中にカルラの意思を確認したのかチヨロネコをボールに戻すNの様子は何処か茫然としていた

「・・・そんな事を言うポケモンがいるなんて・・・」

「カルラがなんて言ったのか知らないけどポケモン達の声は聞かないままじゃ彼等から

見れば《解放》も《利用》も大差ないんじゃない？」

「ポケモンは人に利用されるのが当然といたいたいのかい！」

「違う。彼等が自分の意思で《協力》しているのなら解放なんで有り難迷惑。でも嫌々力を使わされているのなら解放は《救い》になる・・・その時々によつて、相手によつて変わるんじゃないかと言いたいだけ」

ネーヴェエとしてはポケモン達が戦いたくないのならそれを尊重する位の事はする。だが世の中そんな人間だけではない事を知っているからこそその言葉だった

「・・・」

「まあ《人間に傷付けられ利用されているポケモン》を解放するのなら僕も賛成だよ・・・世界は広いんだしこれから色々見て回つて決めたら？」

「ボクにとつてポケモンはトモダチだ。傷付けるのは許せない・・・でもそうだね。もう少し色々な人とポケモンを見てみるよ。その上でボクの答えを決める・・・その時はまたバトルしてくれるかい？」

「勿論！」

ネーヴェエの言葉で何かが吹っ切れたらしく最初の死んだような目と違い僅かに光を宿した目がネーヴェエに向けられた

「丸く収まってよかった）でもアタシの事を忘れるのは酷いよ！二人とも!!」

「あ・・・」

「やっぱり忘れてたんだ！N、次あったらアタシともバトルしてよ！」

「うん！」